

学部留学生支援実施報告・日本語パートナー活動 —留学生と受け入れ学生との良質な友人関係形成をめざして—

堀内 みね子

1. はじめに

2001年度から神田外語大学、外国語学部国際コミュニケーション学科と国際言語文化学科が新設され、それに伴い学部への外国人留学生（以下留学生と略す）受け入れが開始した。近年大学の国際化や多文化共生社会の必要性が日ごとに高まっているなか、本学でも留学生の受け入れを契機として、大学内の国際化を目指した一般学生と留学生の相互理解と交流促進を視野に入れた留学生への支援制度構築が、国際交流課を中心にして学内の留学生関係者によって進められてきている。

本稿では、その支援制度の一例として、神田外語大学学部留学生を対象にした日本語パートナー活動（以下日本語P活動と略す）について報告する。このプログラムは、学部に入學した留学生に日本語パートナーと呼ばれる先輩学生を紹介し、友人関係の形成という目標で異文化接触の機会を提供し、その結果、留学生が大学という新しい学習環境での生活がスムーズに開始できるように支援することを目的としている。双方が同じ大学で学ぶ学生同士として身近なところから異文化接触を継続的に行うことで、それ以前は知識としてしか知らなかった異文化と、より実感を伴って出会うことになる。実践的な異文化間コミュニケーションの体験から、互いの違いや共通点を見出し、また様々な不安、葛藤、偏見などを乗り越える中から新たな気づきや学びが得られ、相互理解が深まることも期待できる。本稿ではまず、日本語P活動を開始した経緯について述べ、次にその具体的な内容について報告する。パートナー学生側から日本語P活動を概観し、その有効性を検討するにあたり、パートナー学生を対象に行った非構成的な個別インタビュー結果と、活動実施後に提出されたアンケート用紙（本稿資料参照）の自由記述部分を主な資料とした。またパートナー活動が順調に進まなかった留学生の体験レポートからの資料も参考にした。

2. 活動開始の経緯

日本語P活動は、留学生受け入れが本格的に開始した2002年度から開始されたが、開始当初はチューター制度という名称で実施されていた。当時は留学生がチューターに期待する役割として、学習面と友人面の両側面からの支援を想定した。前者は、日本語面や日本社会に馴染むために受け入れ学生の存在が支えになり、自主的な学習方法が工夫できるようになること、後者は学部留学生1年生にとって受け入れ学生と机を並べて勉強していくときに、新たに友人を作る第一歩を踏み出す力となる存在という意味である。現在までも、チューター制度に関する多くの研究調査がなされており、その中にはチューター自身を対象とするもの、チューターに関する留学生の意見などを含むものがある。それらを概観した研究から、チューター制度は異文化との接触と相互作用を通しての人間関係形成の橋渡しとして機能し、異文化間教育にとっての意義（田中1997；坪井1999；村田1999；

横田 1999) も指摘される。開始当初はこれらの研究結果を踏まえたチューター制度の実施を目指していた。

神田外語大学には学部留学生を受け入れる半年前の2000年9月に留学生別科が開講したので、実質的にはその時点から学内の留学生支援制度へ向けた活動が開始された。別科と学部のそれぞれの担当者が現場に応じた活動を実践しながら、2004年度までにほぼ現在の制度基盤が整い始めたといえる。留学生支援という考え方は、制度としては留学生を支援する活動と考えられるが、留学生と受け入れ学生双方にとっても絶好の異文化間教育の機会としての可能性が大きいことは、筆者らの先の報告書(ファン・堀内・徳永 2004)でも明らかになった。現在、留学生支援を学内の国際交流促進を目指した活動として位置づけ、①異文化コミュニケーションの場作り、②多言語多文化共生、③ソーシャル・ネットワークの土台作り、④互恵的言語支援、などの活動を実践している。2004年度の主な留学生支援活動として、新生活応援、日本語支援、日本語授業の活性化、の3つが挙げられるが、各活動については、留学生の所属、レディネスや、ニーズ、入学の時期などに応じて、関係者があらかじめ一般学生を呼びかけ、協力者を募る形で行われている¹。このような状況の中2004年度現在は、開始当初のチューター制度を目的別に二つに分け、学部留学生の学習支援を目的とした学習相談員活動と、本報告の日本語P活動を提供している。

3. 日本語パートナー活動の概要

3. 1 募集・登録方法と活動参加者

春/秋の学期開始時、留学生支援制度の紹介とメーリングリスト(以下MLと略す)参加者募集のための説明会を実施している。国際交流に興味を持つ学部生・大学院生、教職員が参加できるMLは2002年度以降に立ち上げられ、支援活動の連絡網としての機能を果たしている。現在は春に登録申し込み期間を限定し、5月連休明けから次年4月末までの1年間を登録期間として、毎年更新する方針である。新規登録者募集の学内呼びかけは、学内チラシ掲示、大学HP掲載、オリエンテーション・ガイダンスでも宣伝し、その後4月中に学内説明会を行っている。登録後は定期的(半期毎)に登録者への継続確認を行うようにし、情報管理、必要に応じた情報訂正、登録者の移動などに伴う煩雑な業務は、現在別科と学部それぞれの事務担当者が対応している。

3. 2 活動目的・内容

P活動は、学部に入学者が入学直後に日本語パートナー(以下パートナーと略す)と呼ばれる受け入れ側の先輩学生を留学生担当者から紹介され、基本的に1対1で友人関係を築きながら、新しい学習環境への適応をよりスムーズに開始することを目的としている。この活動は、入学後の前期に選択あるいは必修科目として留学生対象の日本語科目を履修する留学生にとっては授業の一部として評価されるため、留学生には参加しなければならない活動として位置づけられている。

2004年度の場合は、留学生の入学が確定した時点で、あらかじめ募集しておいたパートナー学生とのマッチング作業を行った。1対1の組み合わせが決定後、ペアになった両学

¹ 詳細については、本報告書第Ⅱ部神田外語大学留学生受け入れの現状と支援システムを参照されたい。

生には了解のうえで互いの携帯メールアドレスを担当者から連絡し、入学式までの約半月間携帯メールを介して、相互に連絡を取りあうところからP活動を開始した。パートナー学生には希望者を募る際に、活動内容、目的、約束事などの説明に加え、過去に実際問題になった事例を取り上げた簡単な勉強会も活動前の1月に実施した。留学生にも入学後に活動内容、目的、約束事などについて、パートナー学生と同様に説明した。本格的に活動が開始するのは5月連休後で、それから7月の期末試験前まで実質的に2ヶ月程度の活動となる。入学直後の新生は、大学生活を送るために多くの情報を理解しながら新しい環境への適応を迫られる。慣れないキャンパスでまだ知り合いもなく、緊張で張り詰めた時期に出会うパートナー学生の存在は大きな支えとなるといえる。P活動の具体的内容については、それぞれのペア同士で互いの空き時間を調整し、週1回程度の頻度で会う時間を作り、対話を通して友人関係を形成していく。活動の詳細は以下表の通りである。

表：日本語パートナー活動について（学生への説明用）

時期	2004年1月	3月中旬～入学前	4月～7月(P活動期間)
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ MLで募集開始 ・ 参加者説明会と受付 ① 1/19 ② 1/26(詳細説明と事例勉強会) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ マッチング ・ パートナー決定 ・ メール友達期間 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 履修相談 ・ 中間報告書 ・ 活動(定期的に会って対話を深める) ・ P会議(2回参加) ・ 終了時アンケート
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学部に入學した新留學生が、新しい大学生活に一日も早く慣れて、安心して学生生活をスタートできるようになるために、先輩受け入れ學生が身近なところで助言や、対話をしながら留學生と1対1で友人関係を形成することで新生活を応援する活動。 		
活動計画	<ul style="list-style-type: none"> ・ 互いに相談のうえ連絡方法、活動場所(定期的に会う場所)活動内容などはきめること 		
互いに心がけること	<ul style="list-style-type: none"> ・ 相互理解が難しい、連絡がなかなかうまく取れない、相互の都合がうまく合わないなど、困難が生じた場合はまず相互に努力をしたり、互いの友人とも相談してみること。 ・ 解決策が見いだせない場合は、いつでも担当者に連絡し、応援を求めること。 ・ 約束日時に都合で会えない場合は、必ず連絡すること。 ・ 教師ではないので無理に教えようと頑張らないこと。 ・ 相手や相手文化を理解する努力をすること。 ・ 自分のできること、できないことを明確に相手に伝えること。 ・ 相手をはじめから特別視しないこと。 ・ 対話を通して理解を深めるようにすること。 ・ 自分ひとりで勝手に考えて判断してしまわないこと。 ・ 率直に考えや気持ちを相手に伝える努力をしてみること。 ・ 興味や関心を持って積極的にかかわろうという気持ちを持つこと。 		

3. 3 実施上の問題点

以下に現在実施しているなかで生じる主な問題について述べる。

1) パートナー募集とマッチング

年度末の1月に次年度活動の参加者をまずMLで募集するが、新入学部留学生約30名に対して同じ数のパートナー学生はすぐには確保できない。そのため、募集はその後も継続し5月頃によく留学生全員にパートナー学生が紹介できる現状では、パートナー希望学生の確保がひとつの問題となる。パートナー学生の確保が済むと次は活動がうまく動き出すかどうかである。マッチング作業は双方の学生と接触が少ない限られた情報の中で行うために、どうしても機械的にならざるをえない。パートナー学生の人数不足の場合は別にして、基本的には1対1の活動を基本としているので、双方の相性のようなものが必ずしもうまくいくとは限らない。必要な場合は調整や介入をできる限り行う。その場合、担当者が双方の学生の活動状況、性格傾向などが把握できれば介入が比較的に実施しやすいが、そうでない場合はせっかくの機会が十分に生かされずに中断してしまうことも生じる。マッチングの前にパートナー学生とできるだけ面談の上で、参加を決定するようにしているが、事前に全てを把握することは難しい。そのため活動前、あるいは活動中に、学生相互の関係形成能力、コミュニケーション能力、葛藤解決能力の育成のためのソーシャル・スキル・トレーニング、自己主張トレーニングなどの教育的な介入も今後積極的に実施する必要がある。これは、以下に述べる問題点3)とも関連する。

2) 学生の主体的活動が基本だが、制度として強制的な枠組みが必要となるジレンマ

学生の主体的な参加意欲に支えられた活動が理想的である。しかしながら、ある一定の期間、継続的で定期的なかわりを持たないと関係性は形成されず²、関係性が形成されなければ、より深化した良質な人間関係が生まれない。それにより期待できる留学生の異文化適応が促進される過程、あるいは受け入れ学生と留学生との双方が学びあう過程へと期待することは難しくなる。つまりある程度制度としての枠組みは必要と考えられるが、それをどのように具体化するかが難しい。授業以外の時間を使って実施する場合は、特にボランティアで参加しているパートナー学生のことを考えると、なおさら工夫が必要となる。単にパートナー学生を紹介し、それ以降は学生たちに任せて自由にしてしまうと活動は動かないうに、活動の意義が生かされないことも十分に考えられる。

3) 共通する活動上の問題解決のための指導・教育的介入の問題

活動の途中で様々な理由で次第に活動が継続できなくなったり、それに伴い活動自体への興味、積極性が失われたときは、担当者が個別に対応しているが、きめ細かく対応することへの負担は少なくない。それでも双方が積極的にかかわる意志があればまだ何とか修復作業も進むが、何かの理由でいったん関係がこじれてしまうと修復が難しいばかりでなく、双方に相手や相手文化への否定的な感情だけが残ってしまうことになりかねない。全

² 本報告書第Ⅲ部分分析と考察の堀内拙稿「大学入学直後の日本語パートナー活動を通じた留学生の自信獲得プロセス研究」を参照されたい。

での支援活動の実践にかかわることだが、留学生はほぼ全員がアルバイトで生計を立てているという現状があり、授業以外には時間的な余裕がない。受け入れ学生も同様にアルバイトと部活などで忙しさは変わらない。そのため週1回パートナー活動の時間を作ることで精一杯という現状である。活動をよりスムーズに運営するため、学生同士の横のつながりを作り、体験を共有化し、そこから相互に学習したり、不安を減少したりするために活動中2回ほどのパートナー活動会議を実施している。しかし、参加者は多いとはいえ、P活動に参加している双方の学生全員を対象にした勉強会のようなことは時間的な問題もあり、現実的に実施するのが非常に難しい。この会議は、活動期間に限定した専用のMLに変えて実施する可能性はある。しかしこの場合対面せずに情報だけが行き交うMLによる意見交換と体験共有が、どこまで生きた人間関係形成に役立つかという疑問は残る。

4. 学生体験感想

4. 1 パートナー学生体験（インタビュー調査から）

活動後に提出されたアンケート結果から比較的良好な関係形成ができたと思われる学生の中で、留学生の母語とパートナー学生の専攻語が同言語の学生数名に、インタビュー（1時間程度）を依頼した。そのうち応じてくれた3名の学生の体験を以下に示した。個人が特定できるような情報は、筆者が発話意図を変えない程度に一部修正した。意味がわかりにくい部分は、筆者が { } に補足説明を加えた。

①参加動機

- 交流があったほうが語学力向上に繋がると思った。一人ちゃんとした友人がほしい、恋愛、身の回りの話ができるようになりたいと思って参加した。（学生A）
- 文化を知ること、旅行に行っても知ることがなかったので。（学生B）
- X語専攻なので、語学面の向上が一番。以前留学生と接した体験から、日本語面で質問されると発見することも多かった。言語以外のことを学ぶのも勉強になる。先生からは語学を学び、それ以外は留学生と1対1で聞かないとわからないし、一人友達になるとそこから広がるので参加した。（学生C）

②活動前に考えたこと、心配だったこと

- X国人の年上の男性だったらどうしようと思った。男性は気難しいと {以前体験した学生から} 聞いていたので。私には手におえないと思っていた。（学生A）
- もし日本語ができなかったら、X語でどこまで会話できるか心配だった。ちょっと一方的な感じだったらどうしようって心配があったが、そんなことはなかった。友達がCLI³で、Z {特定のアジア地域} に対する悪口とか、難しい話ばかりする人がいると聞いていたので、そういう人だったらどうしようと思った。（学生B）

³ CLI は、神田外語大学学部所属する留学生が、中国語学科共同研究室を利用して所定の時間に在席し、中国語学科の学生、及び中国語を副専攻で学ぶ学生に中国語の学習指導を行う制度。

③活動中の体験

- ・ たまにちょっとわからない言葉が出てきたときは、専攻語で言うと理解できた。他の学生より X 国に良いイメージがあったが、でも留学生が凄くいい人で、とても勉強熱心で自分ももっと勉強しなくちゃって思った。(学生 B)
- ・ 同じ授業とっていて、私たちも難しいのに、彼らもとっているんだなあと改めて感じた。X 国人の心理とか授業で勉強するので、私たちのほうが付き合いやすいのかなと思う。{私たちうまく活動できているので、他のペアの困ったことを} 相談されることがよくあったが、私ひとりでアドバイスするのもわからないこともあるので、パートナー会議のときにはほかのグループのことを聞きたいと思った。(学生 C)

④専攻語を母語とする留学生のパートナーになった利点

- ・ プレゼンテーション発表原稿の添削を依頼したら、昼休みに周りにいた留学生にも聞いてくれて、力になってくれた。X 国人の友人の輪が広がってうれしい。自分が X 語を使って話すよう試みることができたのがよかった。CLI と比較すると、個人活動なのでより密接になれるのがいい、CLI では話す内容に限度がある。P 活動の留学生と日本語でいろんな話をして、これで X 語で話せる話題をみつけやすくなって、すごい楽しかった。(学生 A)
- ・ 発表の原稿見てもらったりした。P 活動の留学生は標準語{話者}ではないので、聞き取りは難しかった。(学生 B)
- ・ 自分の X 語の作文を見てもらって、日本人はこういう言葉は使わないが、留学生はこういう敬語を使うんだとわかった。留学生が {標準語話者ではないので} 会話練習はやらなかったが、文法は詳しく教えてくれた。活動中に {担当の留学生とその友人が} 二人でぱっと話すと、私はリスニングが弱いので速くてわからないことがあった。それを言ったら日本人も同じだといわれた。ああ、私たちも同じかと思い知らされた。(学生 C)

⑤活動中に困ったこと

- ・ どこまで誘っていいのかわからなかった。特に経済的状況がわからず、買い物に行くとか、遊びに行く場合、困った。(学生 A)
- ・ 一回でも連絡が取りにくかったり、それが 2 回ぐらい続くともうだめかなって思っちゃうんです。(学生 C)

⑥ 活動を通してよかったと思うこと

- ・ 日本の友達と変わらないと感じた。授業で貧富の差が激しいというようなビデオを見ていたので、今後は気構えないで接すればいいかなと思う。以前、友達のチューター活動に参加して大変そうだったが、それだけで X 国人はこうだと見ないようにしたい。(学生 A)
- ・ 今までは、小さなことからコミュニケーションできるということ、忘れていたとい

うか、自分も忙しいので、なかなかそういう機会が持てたとしても続けられないかなと思ったんですけど、週一回でもこういう機会ができただけでも、自分のなんか、向上心みたいなものも湧いてきてよかった。(学生B)

4. 2 パートナー学生体験（アンケート自由記述から）

今回のインタビューに応じてくれた学生たち以外の学生も、実施後アンケートへ次のように自由記述している。

<経験してよかったこと>

- ・ 後悔やうまくいかなかった点もあるが、学部留学生と話したことが今まで一度もなかったの、彼らの日本での生活や大学での過ごし方を知ることができてよかった。
- ・ 最初のうちはお互い気を使っている感じもして少し不安になったけれど、だんだん打ち解けられて、すごく楽しくなったし、留学生の友達ができたのがうれしい。
- ・ 今まで留学生と触れ合うことがなかったから、まずよかった。なかなかうまくいかなかったが、それはそれで相手のためにいろいろ考えたことが、これからの自分にとってプラスになると思う。考え方に違いがあるときに、自分としてどう対応していくかがこれから大切だと感じた。

<困ったこと、戸惑ったこと>

- ・ 相手との距離感がうまくつかめなかった。食事に誘っても断られたり、時々メールの返事が来なかったりすると、どう接していいのかわからなくなって悩んだ。迷惑なのではないかと考えると、どうすればいいかわからなかった。
- ・ 相手の留学生のほうが年上で、社会情勢などよく知っていて、相手の留学生は私から得られたものはあったのかと不安に思うこともありました。

<感想>

- ・ 相手は思った以上に日本語が上手だったので、日本語を教える必要はなかった。しかし、友達なのに敬語が混ざったりするなど細かい点は、どのようにニュアンスを伝えるべきかわからなかった。
- ・ 後のほうで会えないときは罪悪感を感じ、責任を果たすのに疲れてしまった。楽しかったがもうパートナーになるのはやめようと思う。

4. 3 留学生の体験から（留学生の体験レポートから）

留学生には活動終了時に、体験レポートの提出を義務付けたが、その中でも様々の理由で活動が継続されなかった、あるいは関係が形成されず相互理解が深まらなかった留学生の体験作文から、留学生にとってはどのような体験であったのかを、以下「 」内に示しながら考えてみたい。

定期的に直接会わなかった組は、人間関係が深まらず、相互理解も進まずに終わってしまった場合も多い。その理由として「強制的な活動でやる気になれない」、「知らない人と友達になれない」、「相手が消極的で無口なので話が続かない」、「お互いに忙しいので、会

える時間がない」、「連絡をしてもすぐ返事が来ない」、「お互いに遠慮した」などが多くあげられていた。その中でも、活動が継続できなかったことを否定的に原因帰属しているのが特徴的といえる。「自分も活動に無関心だったが、相手の努力も感じられない」、「相手が遠慮するので、私も遠慮しなければならない」、「私のほうから質問しないと何もいわない。何かちょっと相談したいけれども乗ってくれないというか、あまり役に立たない気がしてしまった」、「約束を守らない」、「多忙で会う時間が少ないならはじめから活動に参加する資格はない」などがあげられた。勿論「自分で友達を作れるから、制度は不要」という学生もいる。パートナーが留学生の母語以外の語学を専攻する学生だったケースでは「自分の国に対して誤った知識しかないことをショックに思い、留学生のパートナーになるのなら、あらかじめ相手の文化に対する知識を持つべきだ。自分の母語の専攻学生だったらこんなことはなかったはず」と述べている。

また、別の留学生は、日本滞在の間に日本人と付き合う難しさを実感していたので「半信半疑」で連絡を開始したが、互いの「都合があわず」結局合えたのが開始1ヶ月後だった。そのため「腹が立ち」、「自分ひとり頑張っている」と感じ「無責任」なパートナーだと感じた。それでも実際に会ってみると自分の国の言葉を「上手にしゃべる」のでそれまでの否定的な感情やイメージが「一瞬」薄まったと感じる。しかし、その後も約束に「遅刻しても謝らず」対話中に断わりもなく「携帯でメールを操作」したことで、最終的にパートナーとの関係形成に「疲れ」て「あきらめ」たという。

結果的に、活動を通してパートナー学生と関係が形成されなかった留学生たちは、その体験により、受け入れ学生へ否定的な印象を強くする。まして、それ以前から否定的なイメージがあれば、それを一層強める結果になりやすい。そして活動後に「やっぱり知らない日本人と友達になれるはずがない」、「日本人の友達を作るのは本当に難しい」、「こんな制度は役に立たない」と結論づけてしまう場合がおおい。

2004年度は28人の留学生が入学し、全員に1対1でパートナー学生を紹介した。その結果、良質な関係が形成された学生7人、初めからほとんど活動していないか、或いは自分は努力したが相手の学生に問題があって中断したが12人、意義のある活動だが義務的に参加し、初期に数回会っただけでその後は連絡せず、活動も途中で中断した学生が9人という結果であった。

5. まとめと今後の課題

インタビュー結果からは、パートナーとして活動した数名の学生たちにとってはパートナー体験の意義が認められる結果が得られた。3名のインタビューとアンケートの結果からは、少なくともそれ以前に留学生と身近に接したことや、かかわったことがなかった多くの学生にとって、留学生と身近に接するよい機会になったといえる。友人関係が形成できた学生にとっては、留学生との活動を通して異文化に対する理解が広がり、更なる興味が湧いてきたことも伺えた。このように関係が友好的に形成されると得るものがある反面、特に留学生側からの主観的な活動に対する感想からは、関係作りの困難さが浮き彫りにされ、パートナー活動が良好に継続されなかつただけでなく、否定的な原因帰属も行われていた。田中(2000)の研究からも、異文化環境下における対人関係において、特に適

応の鍵になるのはホストとの関係だが、この関係性はゲストからのアプローチがなければ進展しづらく形成が難しい（115 頁、172 頁）ことも示されている。留学生が活動やパートナー学生とのかかわりを否定的に捉えてしまえば、活動の友好的な促進は妨げられ、友人関係の形成は期待できない。異文化性に起因する問題を留学生に対して何らかの学習で補いながら対人関係形成を促し、人的資源の活性化をもたらす方向が重要と考えられる。加えて今回の活動からもうかがえるように、単発的な活動より相互関係が維持され進化するためにも継続性のある活動が人間関係の形成に重要なことも示唆された。

今回は、パートナー活動を概観し実施を報告するにとどまり、結果を分析するまでには至らなかった。今後もさらに本活動を継続しながら研究を進めていきたい。

参考文献

- ファン, S. K.、堀内みね子、徳永あかね（2004）『留学生支援システム構築のための International Encounter Group の可能性』神田外語大学異文化コミュニケーション研究所 共同研究プロジェクト成果報告書 研究代表：サウクエン・ファン。
- 田中共子（1997）「日本人チューター学生の異文化接触体験（2）：その役割と異文化接触に関する質問紙調査」『広島大学留学生センター紀要』7、84-108 頁。
- 田中共子（2000）『ソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版。
- 坪井健（1999）「留学生と日本人学生の交流教育」異文化間教育学会編『異文化間教育』13号、60-74 頁。
- 村田雅之（1999）「インターフェースとしてのチューター」異文化間教育学会編『異文化間教育』13号、120-131 頁。
- 横田雅弘（1999）「留学生の支援システム最前線」異文化間教育学会編『異文化間教育』13号、4-18 頁。

資料；実施後アンケート用紙

記入者名： _____ ・ _____ 学科 _____ 年生
パートナーの相手学生名： _____

1. いつも会った場所： _____ 2. 一回の時間：約 _____ 分

3. 頻度：1週間に _____ 回ぐらい（今期会った回数全部で _____ 回）

4. あまり会えなかった場合、理由は？ _____

5. 会った時、主にしたことは？ _____

6. 今回はしなかったが、次回機会があればしたいと思うことは何か？

7. 始める前、相手に対してどのような印象・イメージを持っていましたか（どんな人たちだと思ったか）

8. 経験後（上記）7について、イメージが変わりましたか。
（ はい ・ いいえ ・ どちらでもない ）

→ 「はい」の場合、どう変わりましたか。

9. 始める前に期待したことは何ですか（○は何回でも可能）。

a.勉強友達・ b.会話練習・ c.互いの文化を知る・ d.遊び友達・ e.楽しい時間・
f.友達になる・ g.困ったとき助けあう h.知らないことを互いに教えあう

i.その他 _____

10. 期待通りできたことは何ですか。○を付けてください。

[9. と同じ選択肢 a. b. c. d. e. f. g. h. i. _____]

1 1. 経験して良かったと思いますか。 (はい ・ いいえ ・ どちらともいえない)

→ その理由は？

1 2. 体験中困ったこと / 戸惑うこと / わからないことなどがありましたか。
(はい ・ いいえ ・ 特にない)

→ 「はい」の場合、それはどんなことですか。

1 3. 自分の母語と、パートナーの専攻語が同じ言語の人のみ記入してください。
互いに役立つ点、よかった点があれば書いてください。これについて後で、もう少し詳しい体験のインタビュー調査が可能な人は、○をつけてください。(YES・NO)

1 4. 感想 (自由記述)
